

大阪府内には、日本一の数を誇るものづくり企業があります。それだけ多くあれば、中にはとても面白いことをしている企業があるに違いない……なのですが、MOBI6の取材記事は、間違いなしとびきりの魅力溢れる企業ばかり。どんな話を掲載するか、編集者を悩ませるとびきりのネタをぜひご覧ください。

続く▶ [MOBIWEBに全文掲載中!](https://www.m-osaka.com/jp/moov/) <https://www.m-osaka.com/jp/moov/>

1 スピード感×企画力 繊維素材のオーダーメイドを武器に。

国内外の大手アパレルメーカー向けにニット製品用の糸を提供するエップヤーン株式会社。代表取締役の筒井利彦氏の祖父が船場で糸の会社を営んでおり、それを継いだ父が独立して2000年に東大阪で創業した。同社の特徴は糸を顧客のニーズに合わせてアレンジできる点にある。たとえば何色もの糸で撚り合わせるなか一色の糸だけ太くする、あるいは一色だけ素材を変えるなど組み合わせは幅広い。それによりデザインや風合いなどの表現も変幻自在にできる。社内には本生産の現場でも用いられる試験撚糸機、いくつかのゲージの編み機、ワインダー（糸を巻き上げる機械）などサンプル糸をつくるための一連の機械を揃え、ニーズに迅速に対応。繊維素材のオーダーメイドとして常に新しい素材をつくり出し、提案もするという。細かく分業化された繊維業界で、原材料の選定から設備、撚糸のアレンジ方法まで考えぬき、生地と合わせたときの見え方も含めて企画提案できる会社はほとんどなく、大きな武器となっている。Tシャツの型崩れや縮みの原因は糸がねじれようとする力によるもので、同社では創業以来、このねじれをゼロにコントロールする「ゼロトルク撚糸」の技術を磨いてきた。これまでは高級衣料のために使ってきたが、これを用いて丈夫で型崩れせず、着心地のいいTシャツを



表紙のデザインから社内で制作した見本帳。それぞれの糸を組み合わせるとどうなるのかひと目で分かる。ここにない組み合わせも、翌日には糸を撚り合わせて編地になった状態で見られるというスピード感も



素材の良さを贅沢に感じてもらえる、モンスターオンスTシャツは生地がケタ違いに分厚い。ゼロトルクの糸で型崩れを防ぎ、表面に炎が当たっても燃え広がりにくく、引っかいても糸のほつれを起こしにくいなど、強度は抜群

つこうと、2017年には高品質Tシャツブランド「東大阪繊維研究所」を立ち上げ、本社内の直営店で販売している。そこにはニットセーター用の糸づくりで培ってきた技術と知識をフル稼働してつくられたアイテムが並ぶ。直営店は花園ラグビー場のお膝元とあって、ラグーマンもよく訪れる。元神戸製鋼の南條賢太氏との出会いもここから。話すうちに「ラグーマンをかっこよく見せる」をテーマに新商品を共同開発し、ラグビーを通じて子どもたちの心を豊かにする南條氏の活動への協力にもつながっていった。「スポーツとは無縁だった自分が、Tシャツを通じてラグビーの世界を知ることができた。これからはうちのTシャツがものづくりのまち東大阪で、いろんな人とつながるコミュニケーションツールになれば」 続く▶ [▶](#)

エップヤーン株式会社

<https://www.epp yarn.co.jp/>
東大阪市東江2-3-32
TEL 072-968-8615



南條賢太氏は神戸製鋼で2度の日本選手権優勝後、プロ契約選手となり2010年に引退。現在は出身地でもある東大阪市内で、小学生たちにラグビーの楽しさを伝える活動を続けている

2 ブランドや商品の価値を高める パッケージのあり方を追求。

ジュエリーケースは素敵なシーンを演出する名脇役。映画やドラマでのここぞというシーンに登場し、ケースを開けた瞬間、物語は最高潮に達する。三栄ケースはそんなジュエリーケースの製造からスタートし、現在は商品のブランディングを支えるパッケージの製造と企画を得意とする企業。ジュエリーケースとして多くの人がイメージするのが、ベルベットのような美しく滑らかな外観だろう。これは静電植毛（フロッキ）加工が施されたもので、同社の原点ともいえるコア技術。静電植毛加工は、電力を利用して素材に短繊維（パイル）を植えつけていく技術。この技術を初めてジュエリーケースに応用したのは、代表取締役である浜名雅広氏の祖父である。

祖父が現在の道すじを決める発明をし、父がそれを組織として整え、さらに躍進の礎となるインドネシア工場をつくり発展させた。では自分は何をすべきかと考えた浜名氏は、クリエイティブな方向に自社の進むべき道を見出した。勉強会へも出かけ、クリエイターとの交流を重ねた。そしてパッケージのあり方を見なおしたうえで、多様に開花させる「塚ラボ」を展開する。ラボではコマ何mmまで計算してデザインし、さらに効率の良い組み立て方まで考えた設計ができる。「高価な商品を入れるパッケージなので、とことん詰めた」



1993年にはインドネシアに工場を開設、メイン工場として9割近くがこちらで生産されている。そのクオリティの高さから海外でも顧客を増やしている

ものづくりに携わる人なら誰しも、技術や製造方法、スペックの話がしたくなる。それは製品に自信があるから。しかし最近では少し変わってきた。「もっと消費者の立場に立った提案、顧客が何を求めているのかを探り引き出して、必要とあればパッケージをつくるし、そうでなければ最適な方法と一緒に考えます」。またパッケージには、大切なものが収められる気品や佇まいが備わっているかも重要だという。これもクリエイターとの交流から芽生えた感覚。気品や佇まいは数値化できないもの。そしてつくり手の美しさへの興味や探究心がなければ生み出すことはできない。最近ではそんな話のできる人材も増え、社内カルチャーとして根づきつつある。デザイン思考をともなったものづくりが同社の未来を切り拓く。 続く▶ [▶](#)

三栄ケース株式会社

<https://san-ei-case.com/>
堺市中区毛穴町128-9 TEL 072-289-8583



紙・繊維・木材・金属・樹脂、さまざまな材料を用いて、さらに印刷技術を組みあわせることで、これまでに存在しないパッケージの表現や可能性を追求



塚ラボでは、3DプリンターやCAD/CAMカッター、レーザーカット機なども併用しながら、機械だけでは加工することができない、繊細なものづくりを手作業と合わせて取り組む

3 パワフルな改革と 若手の活躍で、 未来に向かって突き進む。

製缶業という一般的なには曲げ・切断・溶接などをおこなうイメージだが、旋盤加工やバフ研磨まで内製化を進める企業がある。1939年創業の大和鋼業株式会社は、分厚い金属板に曲げや溶接を施し、タンクや水槽などをつくりあげる。これらは圧力容器や攪拌機メーカーに納品されモーターや計器をつけたうえで、大手化粧品メーカーや薬品メーカーにて使用される。この生産体制を整えたのは代表取締役の大竹順氏で社長就任以来、工場長とともに就業規則や給与体系の改定、設備関係、人材教育までさまざまな改革をおこなってきた。

多くの認証も取得した。ISOからはじまり最近では経営革新計画も承認された。テーマは「ステンレス加工の準ワンストップ生産方式の取組み」で、材料を仕入れたら同工場でほぼすべてを一貫生産するというもの。これより以前、約46%だった内製率を現在70%弱まで高めている。こういった認証取得は大竹氏の発案。「製缶業は多い。埋もれないよう、名刺を見たらすぐに思い出せる会社にするためにはひと目で分かる認証取得だ」と。それは社員への資格取得奨励にもつながっている。「全ての社員は技能士など、国家資格や民間資格に挑戦してもらっている。試験費用は会社が持ち、就業後の練習や学科の勉強は残業扱い。試験日も休日出勤扱いにしています」

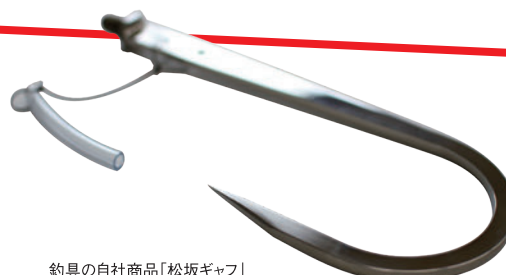


大阪市内に約300坪の敷地を持ち、ステンレス圧力容器や輸送タンクなどを製造。特殊機械加工を除いて、製缶・バフ・機械加工がすべて自社工場内で可能

工場には若い人が多い。大竹氏はなぜうちに依頼するのか顧客に聞いたことがある。「皆さん様様に、若いスタッフがなくて5年後10年後も元気に働いているだろうからと言われる。将来性込みで依頼されているんですね」。現在平均年齢は35歳。しかもその多くが社員からの紹介による入社というから驚く。自分の職場を紹介して一緒に働きたいということは、いかにここが居心地良く働きやすいかという証拠だろう。入社した若い社員はサッカー経験者も多く、鶴見緑地にあるフットサル場を借りて月1回大会を開催し、社長も一緒に汗を流す。そんなアットホームな雰囲気を肌で感じ、入社を希望する人もいるそうだ。 続く▶ [▶](#)

大和鋼業株式会社

<https://yamatokogyo-kk.com/>
大阪市城東区今福西4-2-12
TEL 06-6932-2881



釣具の自社商品「松坂ギャフ」

MOBI WEB記事掲載中



10代～30代前半の若い従業員が約半数を占める。現場の責任者である工場長も40代。また父子2代にわたって勤務するケースも。離職率が低いのも自慢だ

続きは

